季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

冬号

2005-6

12,1,2月

横道歴史散歩

◉ ひろば ◉

公平誠実の外交を
貫きとおして近代外交史を
生きた人

芳澤謙吉

巻頭エッセイ●このまちのこと

上流から下流へ
下流から上流へ

【カメラの眼】

いつもこんなに賑やかならいいのにね

季刊 直江の津 第20号 冬号
2005・06―12・1・2

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
上流から下流へ 下流から上流へ　富永幸司　3

■横道　歴史散歩　4

■ひろば
公平誠実の外交を貫きとおして近代外交史を生きた人
芳澤謙吉　16

■カメラの眼　14

■読書びと
アメリカの風　猿谷要著　28

■くびきの郷土食　24

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。

♣巻頭エッセイ
富永幸司さんのこと

昭和24年　三和村（上越市三和区）に生まれる。
有機農業、無農薬栽培の米作りを中心に農業を続けている。
地域を元気にするさまざまな活動を「楽しく」やっている人でもある。



桑取小正月行事　鳥追いの子どもたち

上流から下流へ　下流から上流へ

富永幸司

私が住む集落の半径一・五キロ範囲ほどの自然生態系をまとめた『ちいさな自然誌』が発刊された。

氷河期時代から営々と生き続ける植物、美しい写真と分かりやすいことばで里山の生きもの達が紹介されている。一枚一枚の写真や説明は、見失っているものへの問いかけでもあり、かけがえのない自然へのゆとりを語りかけているのではないかと思う。毎年、里山の道刈りを続けている。守るとともに生かし、楽しんでいく事をもっと考えてみたい。

失ったら戻すことのできない自然に囲まれて生活していることに、言い知れぬ感動を覚えずにはおれない。

高田・直江津の平野を望むこの東部丘陵地は、約二千五百年から三千年前、人々が生活を始め、里山からは縄文中期・晩期の土器、石器が出土していて、子供の頃はよくひろいに行ったものである。

湿地での稲作が始まると人々は高田・直江津に定住を始め、七世紀から九世紀にはこの東部丘陵地の窯群で造られた大量の須恵器が保倉川を下って直江津や高田平野へ運ばれ、地名にも須恵器を意味すると思われる保倉川に沿った「末野」という地名の集落があり、その一キロほどの所に窯跡がある。

ところで、縁があって私は直江津の海が望める集落にお世話になって久しい。晴れた日には、広がる海岸線や打ち寄せる波をも確認できそうな眺望である。

関田山脈とその山裾に広がる頸城丘陵地は、春日山や西から南に連なる山々と対峙するように高田・直江津の平野を包み込み、溜池や幾筋もの水系を継いで田畑を潤し、関川や保倉川に流れ込み、日本海はこれらのミネラル豊富な雪解け水を集め海の幸を育んでいるのだ。

進化する時代は、夢と希望が不可欠である。人が創り出す英知は、人間のためにだけあってはならない。共生する時代こそが未来に遺せる贈り物だろう。

横道（よこみち）歴史散歩

●旧上越市編

何か見えると
ついつい足を止めて
覗いてしまうのが
横道
日ごろ見なれた道端にある
歴史の風景



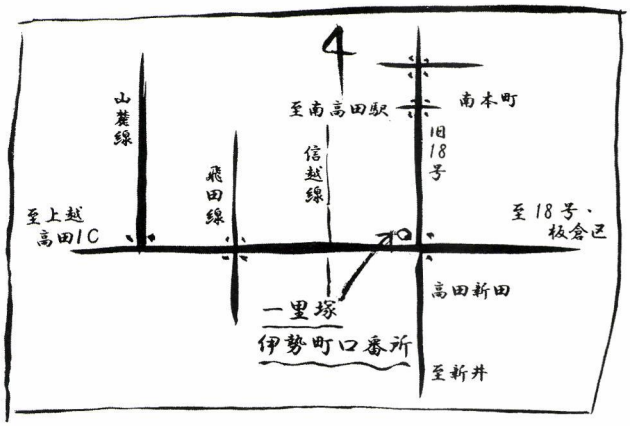


上　ふるさとのゆかり
右　歴史の道しるべ
市内のあちこちで見ることができる

伊勢町口番所 一里塚



道路の開削により移転された一里塚



旧国道十八号線の南本町一丁目を新井方面に向かうと、最近、山麓線に通じる広い道が切れて十字路になった所に、伊勢町口番所と一里塚があります。かつては丁字路で、しかも雁木の下にあったので、なかなか気づきませんでしたが、道路工事に当たって少し移動して整備されています。

ここは高田城下から信州・江戸への出入り口にあたり、番所を置き通行人や荷駄の取締り、運上金の取立ても行いました。高田城下には、そのほか稲田口番所（東本町五・稲田橋詰）と陀羅尼口番所（北本町三）が置かれています。

同じ位置にある一里塚は、江戸時代に定められました。一里ごとに高さ約三メートルの塚を道の両側に築き、頂上に木が植えられ、旅人の里程の目印や休憩の目安になりました。高田城下では、陀羅尼口（北本町三）と伊勢町口にあり、北国街道が城下を通過するのにちょうど一里ということが分かります。

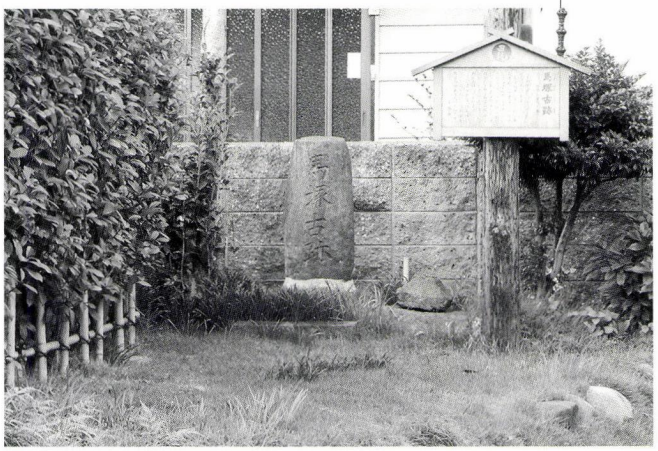
この一里塚には、身延山久遠寺第六四代・日仲が弘化二年（一八〇三）ころ揮毫した「南無妙法蓮華経」の題目塔が建てられています。

寺町の長遠寺・日理が高田藩に願い出て、京都本国寺・日脱の書で、享和一年（一八〇一）に建てられた陀羅尼口の題目塔と共に「南の宝塔、北の宝塔」と呼ばれ、一月の寒中に行われる寒行には、ここまで歩いて来るということです。日蓮宗寺院協会で、塔の移転に当たって説明看板を建てています。



移転前の題目塔

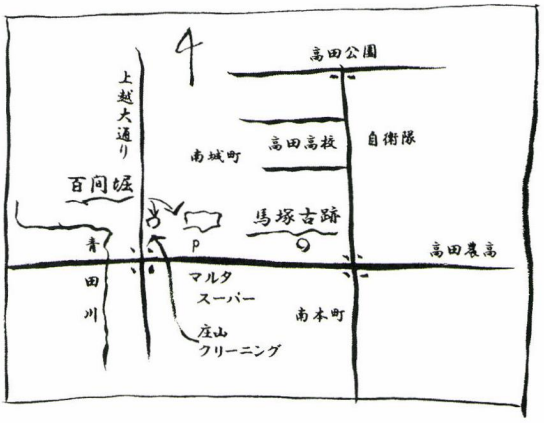
馬塚古跡
謙信公の愛馬 放生月毛の墓



地域の人たちの手で整備されている

上杉謙信が武田信玄に切り込んだ、有名な永禄四年（一五六一）の川中島の合戦で、謙信が乗っていた愛馬「放生月毛」が傷つき、帰途この地で死んでしまったため、ここに葬ったと伝えられています。

それが、いつしか「うまづか」または「まづか」と呼ばれる地名になりました。町内の人達によって、案内板が取り付けられ、きれいに整備されています。



百間堀



わずかに堀の面影を残す（昭和63年撮影）

南本町のマルタスーパーの駐車場の奥へ行くと、小さな池を見ることができます。「百間堀」といわれた高田城の一番南側の堀跡で、上越大通りの庄山クリーニング店の前に「史跡　百間堀跡」の碑が建っています。

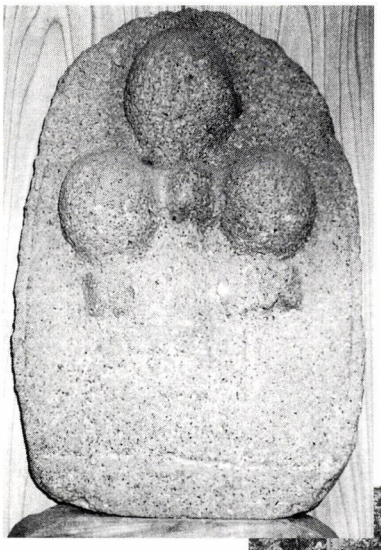
実際には二百間（三六〇メートル）、幅十四間（二五メートル）で、築城前は青田川でしたが、築城に当たって流路を西に九〇度曲げ、その跡を堀にしたものです。

堀の水は青田川の底に石造の水門を造って入れ、余分な水は外堀に流れるようになっていました。百間堀と青田川の間が城の入り口に当たり「枡形」が造られていました。

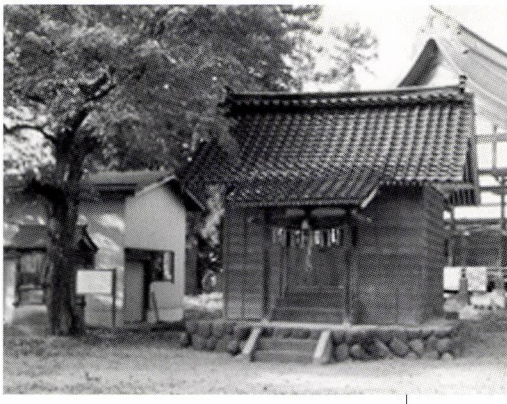
乳観音



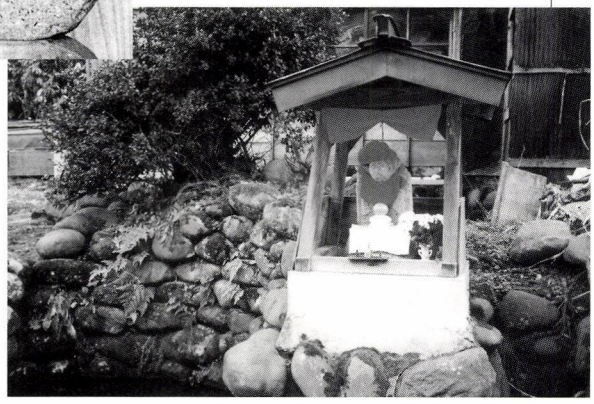
飯田のまち並



乳観音



日月神社　左奥に乳観音が祀られた祠がある
日月神社の後ろは明照寺



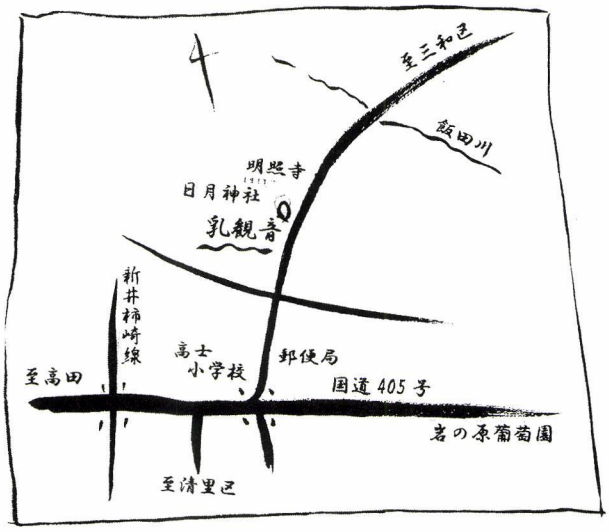
道路の拡張前はこのような風景もあった
地蔵さんが祀られているところには清水が出ている

国道四〇五号線を東に向かい、高士小学校前の交差点を左折して行くと、飯田地区の中央部、日月神社境内に「乳観音」と呼ばれる一石三尊仏が祠に安置されています。

油田という所から出土したと伝えられ、奈良時代の作と考えられています。

その形状から、乳観音と言われるようになり、乳が出ないときに拝むと出がよくなると言われ、今も厚い信仰を集めています。毎年、五月八日に、隣の明照寺と地域の人たちによって祭礼が行われています。

このあたりは、道路が拡幅されるまでは、街道と宿場の面影をよく残していました。



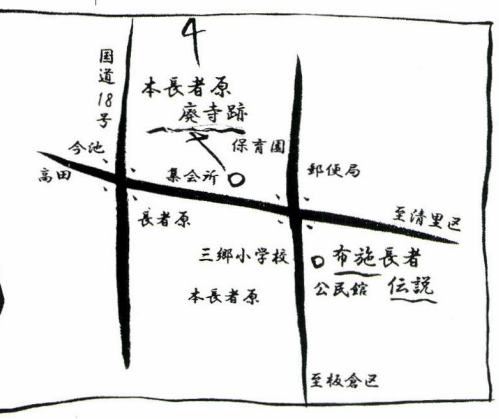
本長者原廃寺
布施長者



この田園風景の下に国分寺が眠っている？



この礎石の模造品も
行方不明になった



国道十八号線の今池交差点を清里方面に向かうあたりの長者原に、中央に直径九〇センチ、高さ十五センチの突起がある、一辺二・七メートルの「長者の蔵の礎石」と呼ばれる石がありました。しかし耕作に不便ということから明治の始めに破壊されてしまいました（大正時代、当時の三郷村長が住民から聞き取りを行い、残った石で十分の一の模型を製作している）。この石は、寺院の塔の心礎と考えられ、近くの今池遺跡の状況から考えて、奈良時代の越後国分寺跡として有力になっています。

長者原という地名は、布施長者の屋敷があったので付いたと言われています。

神仏を大切にする働き者の男がおり、ある日、馬を引いていて、ぬかるみに足をとられ難渋していると、そこから酒と味噌が泉のように湧き出てきたと言うことです。男は次第に財をなして「布施長者」と呼ばれるようになりましたが、前九年・後三年の役で奥州安倍氏に味方したため、源氏方によって滅ぼされたと伝えられています。

笠松宗謙住居
小猿屋小学校
発祥の地

小猿屋小学校の東側を通る道に沿って、笠松宗謙住居跡の碑と小猿屋小学校発祥の地の碑があります。

宗謙は小猿屋村の庄屋の長男として天保九年（一八三八）に生れ、十二歳で高田の儒者倉石典太の塾に入り、後に江戸へ出て昌平黌に学びました。

文久一年（一八六一）家督を継ぐために帰郷し、家業のかたわら、私塾を開き近郷の子ども達を教えていました。しかし、蛤御門の変を機に討幕運動に身を投じて、西園寺公望に従って北越戊辰戦争を転戦し、その戦功を称えられました。また、上京して各種の提言を行い、新政府に入るよう薦められましたが、日本の将来に対する教育の重要さを痛感して帰郷し、当時の柏崎県に建言して川浦郷学校（三和区）を創設、自ら教師となりましたが、明治五年、三五歳の若さでこの世を去りました。

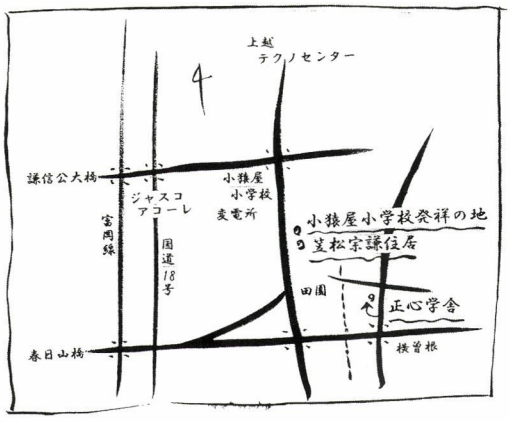
小さな村でありながら、小猿屋小学校がいち早く創立されたのは、宗謙の私塾があったおかげだといわれています。



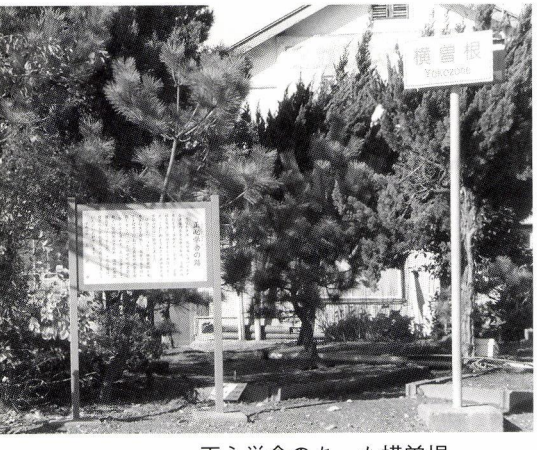

笠松宗謙



小猿屋小学校発祥の地(右)と宗謙の墓



正心学舎



正心学舎のあった横曽根

戊辰戦争に敗北し降伏人として高田藩にお預けとなった会津藩士の中に、漢学・洋学に通じ、後に東大、東京高等師範学校の教授となる南摩羽峯がいました。

彼の名声を知る上越の多くの文化人達が、謹慎の身にもかかわらず、羽峯に教えを乞うために訪れたといわれています。

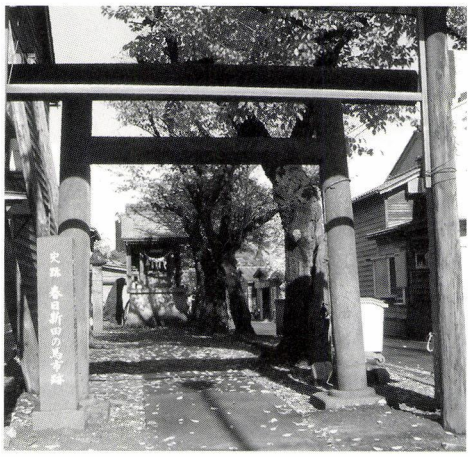
羽峯は全国津々浦々に小学校を建て「家に不学の徒を無からしめるように」と、ことあるごとに力説しました。これに共鳴した上増田(頸城区)の岡田保は、明治三年(一八七〇)謹慎が解けた羽峯を招き、横曽根の大滝米峯宅を解放して私塾を開くことに成功しました。

羽峯は「塾」の語を用いず、「正心学舎」と命名しました。正心学舎は教師・生徒ともに全寮制で、また独特な教育課程で上越における先駆的な教育機関となりました。羽峯が中央に呼ばれて去ると、正心学舎も自然と閉鎖されたようです。しかし、羽峯の教えに共鳴したもう一人に増村度弘がいます。その教育への情熱と遺志は子の朴斎に引き継がれ、有恒学舎(県立有恒高校)となって続いています。

春日新田馬市



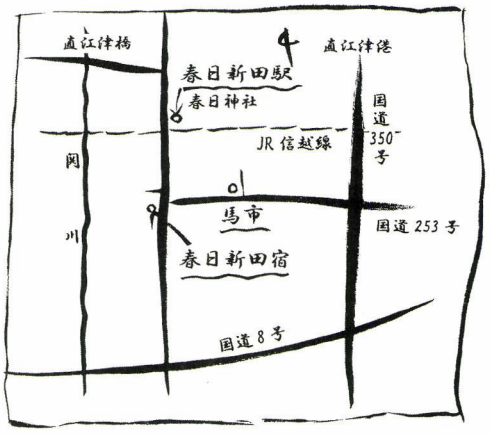
又左衛門の墓と馬頭観音の碑



馬市の碑



終りに近い頃の馬市





宿場の面影を残す春日新田

宝暦十四（一七六四）、博労の又左衛門が十数頭の馬を秋田から買い付けてきて売ったのが、春日新田馬市の始まりだと伝えられています。

当時、春日新田は秋田佐竹氏の領地であったため、佐竹氏の紋所の幔幕と高張提燈を掲げる保護を受け、最盛期には期間中に千頭を超える取引があったと言われています。明治時代になると輸送機関の変化や軍馬として徴用されるようになり、昭和十八年を最後に幕を閉じました。

又左衛門は、その功績により高浪忠太夫と名乗り帯刀を許されました。墓は覚真寺参道に沿って、馬市の碑がある神社の裏に馬頭観音の碑と並んで建っています。

覚真寺は、直江津捕虜収容所で死亡したオーストラリア人捕虜を戦時中でありながら手厚く弔ったことでも知られています。

また、このあたりは春日新田宿場でもあり、宿場の雰囲気を残す家が残っています。

春日新田踏切の横にある春日神社の参道は、JR信越線に遮られていますが、明治二七年（一八九四年）に、新潟方面に通じる北越鉄道春日新田駅が置かれたところで、三一年の荒川鉄橋架設までは、

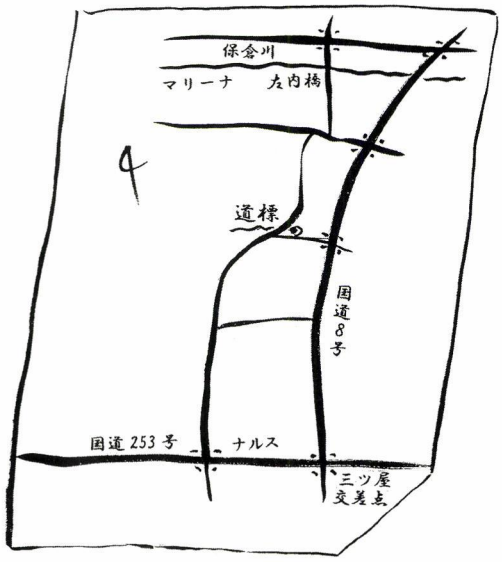
直江津駅で乗り換えて

と「鉄道唱歌」にも歌われたように、どちらかの駅で降り、直江津橋を渡って乗り継いでいました。

道標



正面が道標　右が筆塚



国道八号線を柿崎方面に向かって二五三号線との三ツ屋交差点を過ぎ、次の信号を左折すると民家の庭に

左おう志う道
右さいみち

と自然石に刻まれ、筆塚と並んで建てられています。

「おう志う道」とは、奥州へ向かう道、「さいみち」とは在方へ行く道という意味で、今は静かな住宅街になっていますが、かつては春日新田宿から黒井宿を通って奥州へ向かう北国街道（奥州街道）でした。

郷津



白い石柱は明治天皇聖跡碑

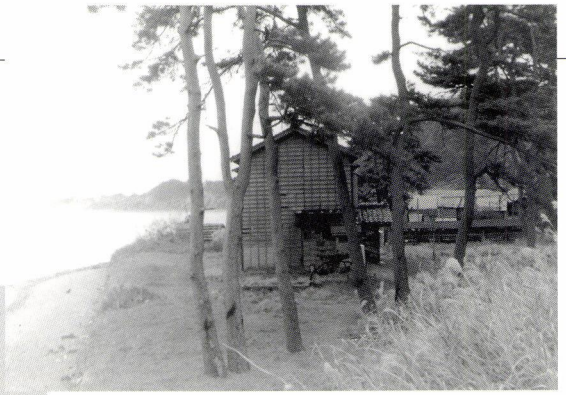
旧国道八号線が、郷津トンネルを直江津方面から抜けた国道八号線と合流する信号の海側に、松が数本植えられた広場があります。

ここは、明治天皇の北陸巡幸の折に立たれた聖跡として、昭和十二年に文部省によって指定され、「明治天皇御野立所」という立派な御影石の碑が建っています。その脇に「史跡郷津」という碑が建っています。

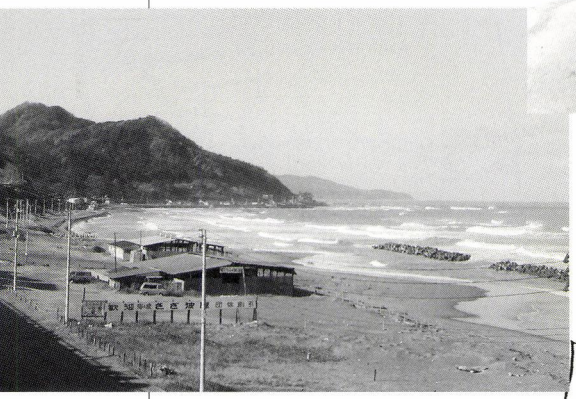
郷津とは「国府の津」がなまったものと言われています。上杉謙信も軍港として使用し、また北西風を避ける格好な入江であるため、今町（直江津）湊の避難港あるいは、北前船の春待ちの湊として、代々高田藩も修築に力を入れています。

明治になると油田が発見され採掘の櫓が建ち並び、また景勝の地として、茶店や旅館もあり、海水浴場としても賑わっていました。

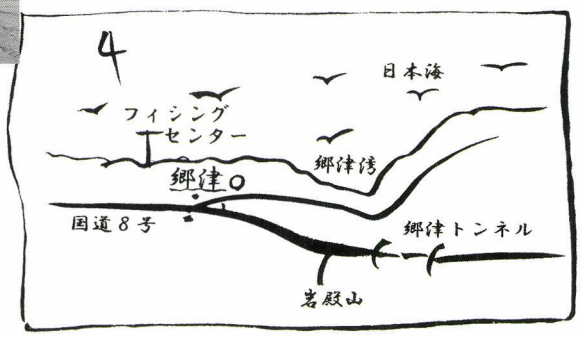
直江津港の改修によって海流が変化して土砂が堆積し、かつての郷津湾の様相は薄れてしまいましたが、それでも、標柱の建つ位置は湾の先端にあるので、昔を偲ぶことができます。



昭和 30 年代の風景　建物は今は無い



郷 津 湾

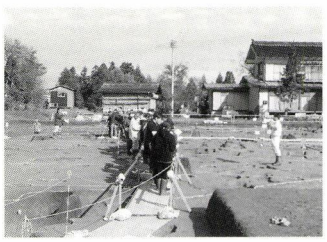


この甕に何が入っていた？

県立中央病院の東、国道 18 号線子安交差点近くに位置する子安遺跡で「設置甕」と呼ばれる須恵器の甕が出土した。平城京での出土例はあるが、新潟県内では初めてのことであるという。

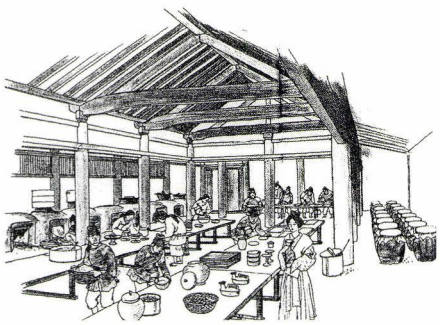
設置甕とは貴族の屋敷や役所の調理場などに、甕がひっくり返らないように穴を掘って据付け、酒などを保存しておく甕のことである。

この子安遺跡にどのような立場の人が住み、どのような暮らしが営まれていたかは、まだ想像の域を出ないが、平成 6 年には現地の近くから「海獣葡萄鏡」が出土し、下新町遺跡、櫛池川を越えて南に隣接する今池・本長者原遺跡など、越後国府の推定地として有力視されている地域にある。



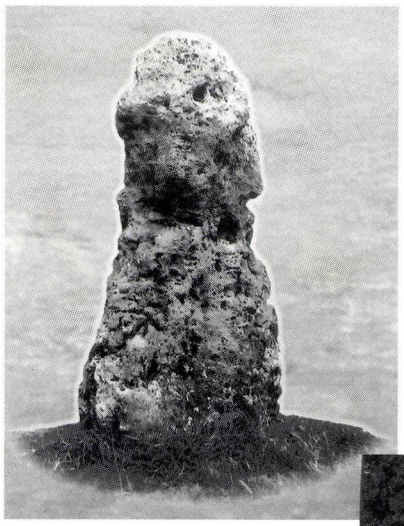


右　出土した設置甕
上　11 月 23 日に行われた現地説明会



イラストの右端に整然と並んでいるのが設置甕
（平城京・古代の都市計画と建築／草思社刊より）

中村十作記念館



人頭税石（宮古島）
賦計り石（ぶばかりいし）ともいう。高さ143cmで、この石と同じ背丈になると課税対象になったという伝説がある



北部工業団地に隣接して記念公園が造成され、記念碑が建立されている。



集落開発センターに併設されている記念館

人頭税は、所得や納税力に関係なく、集落の人の頭数（人口）に応じて税を取り立てる方法や一定の年齢に達すると無条件で課せられる非合理な税制だが、古くから世界的に行われてきた税制のひとつで、近年、イギリスのサッチャー政権が持ち出して物議をかもしたことがあった。

宮古島・八重山諸島では、一六三七年から琉球国によって人頭税が課せられ、明治三五年（一九〇二）まで継続されていた。明治に至っても温存されたのは、明治政府による明治十二年（一八七九）の「琉球処分」に対する琉球士族の懐柔策のためとされている。そのため士族には課税されないばかりか、人々を無償で労役に使うこともできた。

十五歳から五十歳までの男女に課せられ、収穫高の六五％が税という、あまりの過酷さに自らの手足を切断して免税者になる者、自殺、島抜けなどで脱出する者が出た。

稲増村（上越市板倉区）の名主の家に生まれた中村十作（じゅうさく）は、東京専門学校（早稲田大学）に学び、海軍を経て、明治二五年（一八九二）二五歳のとき、真珠の養殖を目指して宮古島に渡った。

そこで十作が見たものは、人頭税に喘ぐ島民であった。彼は真珠養殖事業のかたわら、人頭税の廃止に取り組むことを決意し、島民とともに弾圧・妨害を退けて、帝国議会で廃止を可決させることに成功した。

その恩は永く島民に伝えられ、民俗芸能「アヤグ」にも十作をたたえる唄がある。

数年前から始まった宮古島との交流によって、顕彰碑と記念館の開館に至っている。

■中村十作記念館　稲増集落開発センター
問い合わせ　板倉区総合事務所 TEL〇二五五-七八-二二四一

カメラの眼

いつもこんなに賑やかならいいのにね

十月十日を中心に、上越市内の各地区で多彩な催し物が行われた。そのうちから、高田地区の花ロード、直江津地区のＳＬの来訪をメインにしたイベントをカメラで覗いて見た。どちらの商店街でも「いつも、こんなに人出があるといいね」という会話であった。



一昨年に続いて貴婦人がやってきた



珍しい電気機関車も展示



ミニ SL は子供たちの人気集中で 20 分待ち

互の市も人気







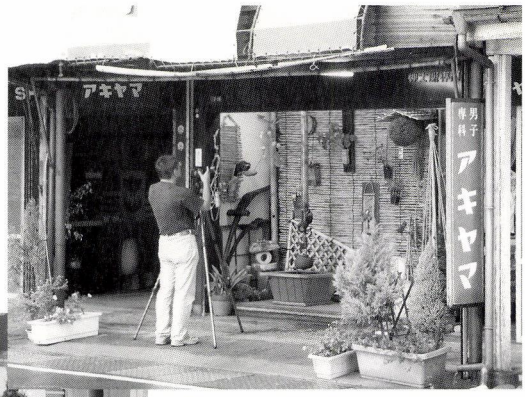
アート縁日も定着してきた

ブロンズと並んで







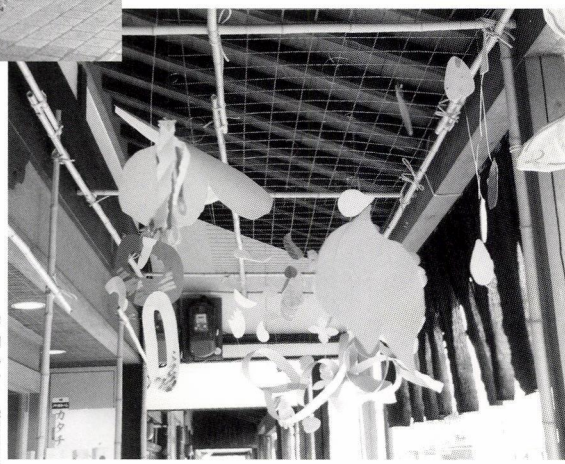




花ロードは遠方からの見学客が増えてきている



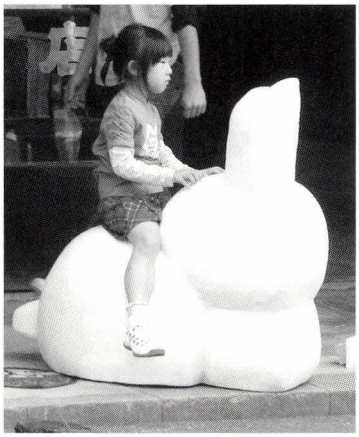
町家のお宝も見学





新しい試みのアート遊(夕)市





上教大と信州大生の彫刻も展示



あわゆき組のイベントもすっかり定着

ひろば

今なお「難民をつくらぬ世界」に奔走する
緒方貞子の祖父

■公平誠実の外交を貫きとおして近代外交史を生きた人

芳澤謙吉

よしざわけんきち





上　芳澤謙吉

下　昭和33年、芳謙吉の生家の一部を記念公園として整備し、晩年の謙吉をモデルに銅像を建立した。

作　者　滝川美一（毘堂・上越市出身）

題　字　吉田茂元首相

顕彰碑　撰文並びに書　川澄農治高田市長

緒方貞子　一九二七～
国際政治学者・元国連難民高等弁務官・国際協力機構（ＪＩＣＡ）理事長。
曽祖父は犬養毅、義父は緒方竹虎。
『難民をつくらぬ世界へ』岩波書店
『私の仕事―国連難民高等弁務官の十年と平和の構築』草思社

稲垣満次郎　一八六一～一九〇八
外交官　シャム弁理公使・特命全権公使　スペイン弁理　マドリッドで客死。

坪井九馬三　一八五八～一九三六
歴史研究方法の基礎を築く。歴史資料価値の段階的分類法を提唱。



父・襄良

生立ち

明治・大正・昭和にわたって外交官として犬養内閣の外務大臣として活躍し、外交界きってのアジア通として知られた芳澤謙吉は、明治七年（一八七四）一月二四日、芳澤襄良（じょうりょう）・須賀（スガ）の三男として、中頸城郡諏訪村字掘之内（現上越市諏訪地区）に生まれ、父が上杉謙信の崇拝者であったため、謙吉と名づけられた。

芳澤家は諏訪村の大地主であり、謙吉の祖父の代までは酒造業だったが、襄良の代になって醤油醸造業に転向している。

父襄良は、横曽根の正心学舎で教授をしていた南摩羽峯に漢学を学んでいる。また頸城改進党に加わって奔走し、初代諏訪村長も勤めるような人物であった。

上京そして仙台

十一歳になった謙吉は、諏訪村の米岡小学校から中学校へ入る準備のために、高田の漢学塾に入った。続いて高田中学校に進んだが、上京して学びたいという気持ちが強く、父に懇願して、十四歳の明治二十年十二月、ようやく願いがかなって上京、神田駿河台の成立学舎に入学した。

当時の謙吉の旅程は、高田から人力車で長野まで行き、軽井沢までは馬車、徒歩で碓氷峠を越えて横川から汽車で上野に着くという五日間の旅であった。

謙吉が入学した成立学舎は、東京大学予備門を受験する予備校で、夏目漱石や新渡戸稲造なども学んでいる。予備校といっても教科書はすべて原書に拠ったといわれている。

途中で成立学舎から東京英語学校に転じたが脚気を患い、その転地療養も兼ねて叔父のいる仙台の第二高等中学校補充科へ入ることになった。予科を経て明治二七年に本科法科に進んだが、父親が政治家を志望することを嫌ったため、一年は法科、二年には文科に替わっている。

外交官試験に挑む

二九年七月、七年間の学業を終えて第二高等中学を卒業し、東京帝国大学文科に入学した。

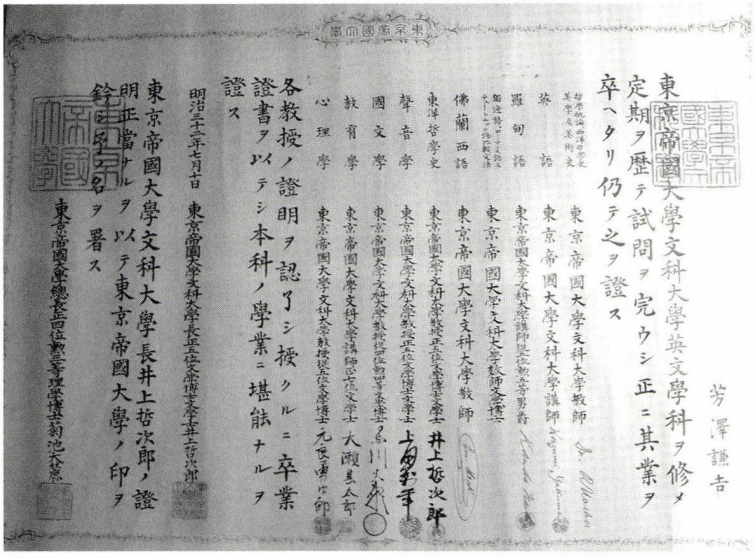
高等中学時代に、後にシャム（タイ）公使になる稲垣満次郎の仙台での遊説に感銘して、歴史に興味を持ち、歴史を専攻することになった。しかし、

史学科の主任教授の坪井九馬三博士は、我々学生に毎回蝕傷だらけの古文書の研究を命ずるので、事志と違ったと悟って、

（「外交六十年」以下同書より）

時代の急務は外国語を知ることにあると、在科一ヶ月で、さらに受験し直して英文学科へ転じた。当時、英文科には小泉八雲（ラフカ





芳澤謙吉

東京帝國大學文科大學英文學科ヲ修メ
定期ヲ歴テ試問ヲ完ウシ正ニ其業ヲ
卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

東京帝國大學文科大學教師
東京帝國大學文科大學講師
英語
東京帝國大學文科大學講師
羅甸語
東京帝國大學文科大學教師
佛蘭西語
東京帝國大學文科大學教師
東洋哲學史
東京帝國大學文科大學教授
聲音學
東京帝國大學文科大學教授
國文學
東京帝國大學文科大學講師
教育學
東京帝國大學文科大學講師
心理學
東京帝國大學文科大學講師

各教授ノ證明ヲ認可シ授クルニ卒業
證書ヲ以テシ本科ノ學業ニ堪能ナルヲ
證ス

明治二十年七月十日　東京帝國大學文科大學長兼正倉院御物整理掛委員正七位勲三等文學博士　井上哲次郎

東京帝國大學總長兼正四位勲二等理學博士　菊池大麓

上　明治29年3月21日　第二高等中学校文科3年生
　　後列左から3人目
下　東京大学卒業証書

ディオ・ハーン）がいて、教えをうけている。

明治三一年の大学二年の半ばころ「謀反気を起こし」密かに外交官になろうと決心して、法科の友人からノートを借りて、学科の合間に昼夜兼行で勉強を始めることになった。

その間、チフスに罹り入院を余儀なくされ、静養のために一時帰郷するという不運に見舞われるが、年が改まると再び上京し、六月に文科の最終試験を終えて赤門を出ると、その足で古本屋の主人を下宿に同伴して、

三年間集めたシェクスピアー初め英文学に関係ある書物を全部で四十五円で売り

（中略）、神保町の有斐閣に赴き、人力車の蹴込に、外交官試験に必要な本を山ほど買い入れ、

房総館山に下宿を借りて一日中勉強に励んだ。

しかし、外交官試験にあたって、

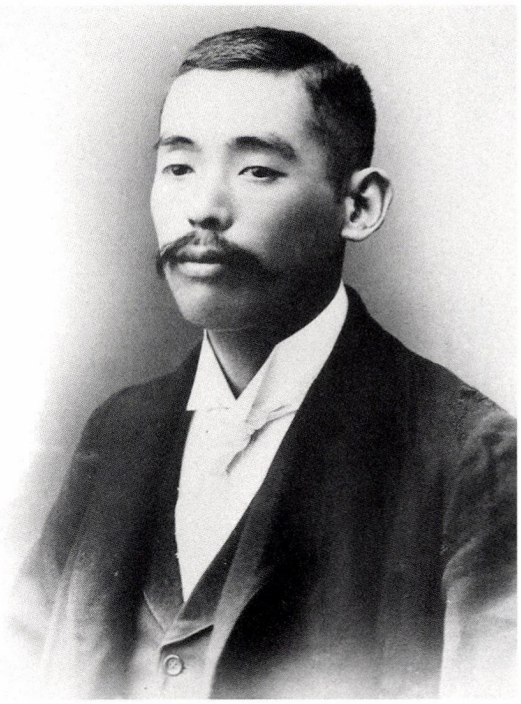
一体、文科にいて外交官試験を受けるとは怪しからぬ、依って絶交するという、絶交状を親友から突きつけられるという一幕もあったが、ほとんど独学で法律全般を学んだ結果、九月に外交官試験を受けてみごと合格した。

この年は受験者四〇名中、合格者はわずか八名であった。そのなかで最初に採用された三名に、外交官補として謙吉も入っていた。二六歳のときであった。

厦門　アモイ　中国福建省
牛荘　ニューチャン　中国遼寧省

参考資料　『外交六十年』芳澤謙吉　昭和33年
その他関係ホームページ
取材協力　久保田好郎
笠松勝
掲載写真　芳澤謙吉記念館所蔵写真・『外交六十年』・北越出版撮影
＊地名・事件の表記は、原則的に『外交六十年』に従った

外交官として



アモイに赴任した謙吉　26歳

謙吉は最初、韓国の京城公使館に赴任することになったが、韓国在勤者だけは徴兵制が適用されたため、願い出て、わざわざ外交官補から領事官補に転官し、明治三三年一月、清国厦門（アモイ）の領事館に赴任した。

赴任してまもなく、有名な義和団事件が起こった。事件は清国各地に拡大していったが、たまたま厦門の西本願寺出張所が火災に遭ったため、当時の台湾総督府は、対岸の厦門に義和団事件の拡大を恐れて、先手を打って厦門を占領しようと図った。しかし、この計画は本国政府の指示で中止となるが、謙吉は領事代理として厦門衙門（地方官の役所）の長官と粘り強い交渉を行い、放火に対する遺憾の文書を受け取ることで事態を終結させ、外交官としての第一歩を踏み出した。

内外で腕を磨く

明治三五年、上海総領事館に転勤となる。上海は地理的条件などから公使館並みの重要さを有し、わずか二年余ではあったが、総領事を補佐して、政治経済の重要問題の交渉に当たり、深夜まで執務することもしばしばであった。

日露開戦後の明治三七年七月、ロンドン総領事館に転勤を命ぜられて帰国し、着任までの間に犬養毅の娘操と婚約した。謙吉は三一歳であった。

ところが、英国行きと結婚を目前にして心躍る謙吉は、突然、日露戦争まっただ中の牛荘（ニューチャン）への転勤を命ぜられた。しかし在任三ヶ月の間に戦争は終結し、旅順、大連を視察して帰国、翌三八年二月、東京永田町の日枝神社境内にある星ケ茶寮で結婚式を挙げ、新妻を伴ってロンドンに赴任した。

赴任して一年、こんどは香港領事に任命され帰国するが、中止となり、政務局書記官として四年間を本国で過ごすことになった。

当時、ポーツマス講和条約に伴う樺太境界協定など、日露戦争の後始末が山積しており、西園寺内閣の林薫、桂内閣の寺内正毅（陸軍大臣と兼任）、小村寿太郎など錚々たる外務大臣に仕えて、難問の事務処理と謙吉自身の見識を磨いた。

明治四三年四月、駐英大使館一等書記官として再び英国に赴き、着任早々、エドワード七世の崩御、ジョージ五世の戴冠式に遭遇している。



大正４年11月
大正天皇大礼で　京都御所紫宸殿

アジアと向き合う

袁世凱の死により軍閥政治が始まる大正五年（一九一六）、北京公使館参事官として赴任、その後、本省にもどり、八年には原敬内閣の指示で「三・一独立運動」が起こった朝鮮に渡って政情を調査し、武力では問題は解決しないと報告している。

大正十二年、亜細亜局長、欧米局長を経て、軍閥政治・排日運動激化で混沌とするなか、六年に及ぶ北京特命全権公使として赴任することになった。

赴任まもなく、北京駐在ソ連大使カラハンとロシア革命で途絶えた国交の再開交渉に臨み、いわゆる「芳澤・キャラハン交渉」を経て十四年一月、日ソ基本条約締結に至り、日ソ国交回復という成果を挙げている。

その後大陸では、昭和三年の張作霖爆殺、六年には満州鉄道を爆破する柳条湖（当時は柳条溝）事件を契機として満州事変への軍部の独走が始まり、謙吉を始めとする公使館は戦線不拡大に腐心し、

長い外交官生活の中で最も緊張し、苦悩した場面であった

と、回想している。



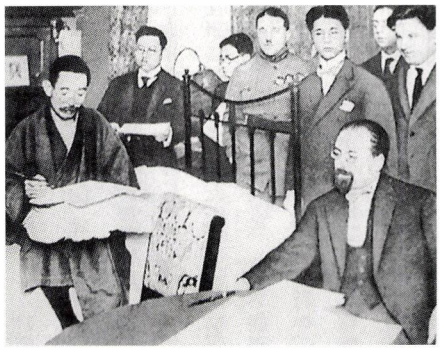
大正10年　生家で　後列謙吉　中央の女性は夫人の操

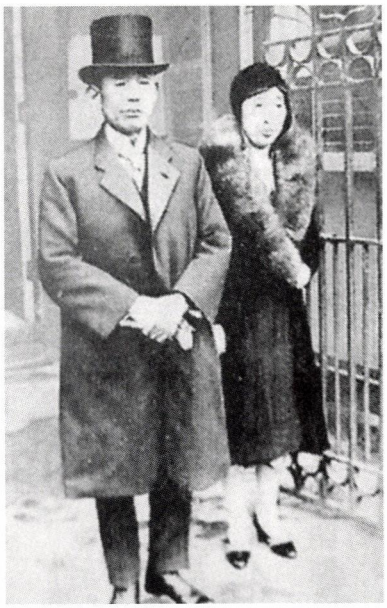
外務大臣として

昭和六年十二月、犬養毅が内閣を組織、謙吉は外務大臣に就任した。

年が変わると、上海事変勃発、満州事変に対するリットン調査団の来日などに対応するなかで、三月、満州国が軍部によって強引に建国された。







上下　大正14年1月20日
カラハン大使と「日ソ基本条約」の調印に臨む―スケート中に骨折したため、入院中の北京の病院で
右　外務大臣就任の日　夫人とともに

謙吉は長年の中国での経験から、「建国」には無理があるとして、犬養首相とともに承認できないとして強く反対したが、結局「時の勢い」に押し切られることになってしまった。

そして昭和七年五月十五日、犬養首相は海軍青年将校の凶弾によって倒れた。いわゆる「五・一五事件」である。

犬養内閣は総辞職し、謙吉も職を辞した後、貴族院議員に勅撰された。

太平洋戦争開戦の直前、昭和十六年十一月、仏印（フランス領インドシナ）特派大使として、再び外交の舞台に立ったが、二十年五月外交顧問に任ぜられて帰国する。八月七日には枢密顧問官に親任され、ポツダム宣言受諾・無条件降伏を強く勧め、十五日の御前会議で承認された。

終戦後、仏印大使であったことを理由に公職を追放され、収入が絶たれたうえ財産税・農地解放などにより家財を売り払って凌ぐという生活が二六年まで続いた。

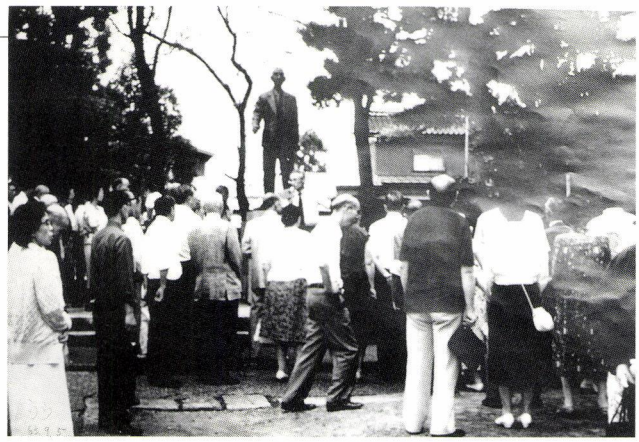
台湾へ

窮乏生活のなか、突然、第四次吉田内閣により初代中華民国大使に任命された。

赴任に当たって、敗戦当時の日本軍に対する蒋介石総統の「仇に報ゆるに恩を以ってせよ」という態度に、感謝の意を伝えてほしいという天皇の言葉を総統に伝え、また北京以来の旧知の人々とともに、台湾外交に良好な道を開き、昭和三十年二月、六〇年に及ぶ外交官生活を終えた。

昭和三五年、川澄高田市長を会長に記念館設立奉賛会によって生家に芳澤記念館が開設され、東京の邸宅から茶室「米南荘」を移築、銅像の建立、公園の整備が行われた。

昭和四十年一月五日、九一歳をもって外交一筋の人生を終えた。
従二位勲一等旭日菊花大綬章
高田市名誉市民



昭和 34 年 9 月 6 日　銅像除幕式当日



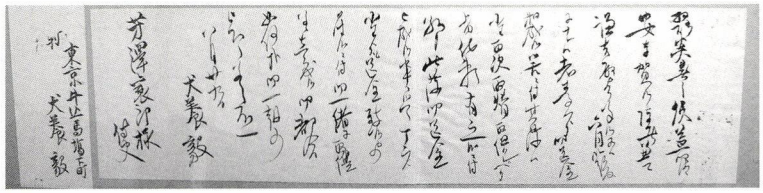


謙吉は、外交官生活を終えた直後に執筆した『外交六十年』において、外交官生活を回顧した後、わが国の再興の基礎は誠意にあり、青年男女の誠意が国力の基礎であると結んでいる。

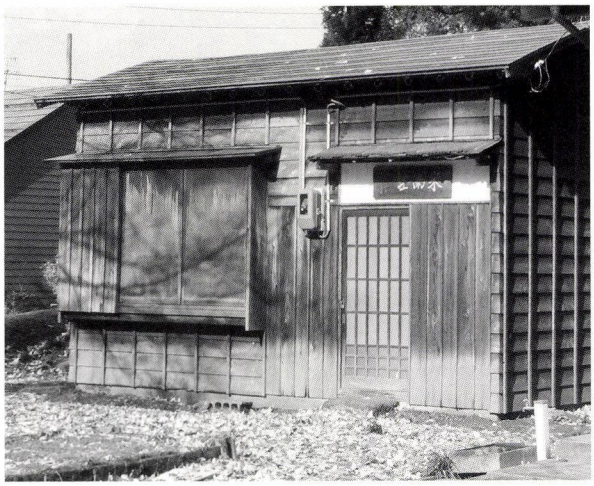


昭和 37 年　米寿の祝い
左の人は吉田茂





犬養毅から謙吉の父襄良宛の書簡





上　東京から移築された茶室「米南荘」
左　茶室に掲げられた謙吉揮毫の「米南荘」の掲額　米南は謙吉の号



記念館の展示室



謙吉が父母の顕彰のために建てた碑
庭内にある



芳澤記念公園の看板
植木公元上越市長書

くびきの 郷土食

たら汁





霙が降り初雪が来ると、魚偏に雪と書く、鱈汁もいいなあと思うようになる。

鱈汁のタラは、和名をスケトウタラといい、あまり獲れすぎて網を引き上げるのに「助っ人」が必要なのでという説と、佐渡沖で大量に獲れるので、佐＝スケ・渡＝トでスケトウタラという説がある。スケソウはそれが訛ったのではないかという。

因みに、タラの子である「明太子」のメンタイとは、李朝のころ明川郡の太という漁師が獲って使節に供した魚から明太、ミョンチョンが九州に渡ってメンタイになったのだといわれている。

鱈汁が最も有名なのは越中宮崎で、国道八号線のそのあたりを「鱈汁街道」という人もいる。

味噌汁仕立の鱈汁に、地域で決定的な違いが出るのが「酒粕」を入れるかどうかである。

先の宮崎では酒粕を入れないのが普通だし、鱈汁を食べる地域のほとんどが入れていないようだ。（真鱈汁の地域は除外）

わが上越地域では、一般的に入れる方が多いが、酒粕を「入れる」「入れない」地域が微妙に入り組んでいる。

■作り方

鱈を好みの大きさにブツ切りし塩水に浸けて身を締め、よく洗って魚の臭みをとる。この時に鱈の肝は必ずとっておき、魚と一緒に鍋に入れる。コクが出て旨味が増す。鍋にお湯を沸かし、味噌を半分溶いて鱈を入れる。魚に火が通ったら煮汁で溶いた酒粕とささがき牛蒡を入れ、残りの味噌で味をととのえる。仕上げに葱を加える。（板粕の場合は先に柔らかくしておくか、魚と一緒に鍋に入れておくとよい）

直江の津

20号までの主な目次

「直江の津」は創刊以来本号で二〇号を迎えることができました。わずか五年ですが、どのように、この地を耕し掘り起こし得たか……。二〇号までの主な内容を目次で追ってみました。



＊五号以降のバックナンバーはお求めいただけます。
（頒布価格＋送料）

二〇〇一年三月／春号　通巻一号

特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する
2掘ったら何が見えるか直江津―中世都市・越後府中・直江の津
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ　水族館に何を見るか
フリースペース　石瘦庵主茶人宗次という人
読書びと　夢の途上　ラフカディオ・ハーンの生涯　工藤美代子著
見る目　神饌箱
特別寄稿　老いるとは―心理学的立場から

二〇〇一年六月／夏号　通巻二号

特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ―直江津の産業史
4人々のくらしに息づく「祇園祭」―囃子の伝承を通しての一考察
ミニ特集　村上の底力―町屋の人形さま巡り
知の楽しみ　妙高山―現在・過去・未来
フリースペース　茶室見学ノート―石瘦庵
読書びと　諫早菖蒲日記　野呂邦暢著
見る目　シンボ凧
わたしの直江津　世界の果て　杉みき子
インタビュー　坂詰吉寛さん　上越コンピュータサービス社長

二〇〇一年九月　秋号　通巻三号

特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ　「緑の島」の物語るもの
フリースペース　こんなまちがあった―『百歳バチャとそのふるさと―直江津町古城の思いで』
読書びと　画家の妻たち　澤地久枝著
見る目　織部柳図徳利
わたしの直江津　分岐点　吉越泰雄

二〇〇一年十二月／冬号　通巻四号

特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔―二十年前に直江津を掘った人たちがいた
ミニ特集　マニアックな直江津歩き
知の楽しみ　世界一の山脈　関田山脈
フリースペース　こんなまちがあった2
投稿　観音寺向拝鏝絵―あまりにも正統なるが故の異形
読書びと　宮本常一を歩く　毛利甚八著
見る目　どぶね
わたしの直江津　安寿恋しや　馬場和明

二〇〇二年三月　春号　通巻五号

特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン
ミニ特集　同じまちなのに知らない〝もの〟

ばかり？
知の楽しみ　能生白山神社―春の大祭と舞楽
フリースペース　「とんちん館」感傷旅行
読書びと　寺暮らし　その日暮らし　森まゆみ著
見る目　木造大日如来坐像
わたしの直江津　「ゴチ……？」　米山康久

二〇〇二年六月／夏号　通巻六号

特集　1米山をめぐる民俗文化
　2報道のなかの祇園祭
ミニ特集　春日山で遊ぼう
知の楽しみ　雪国の固有とよばれる植物
フリースペース　山を楽しもう―中高年向け安全登山のすすめ
読書びと　イワナの夏　湯川　豊著
見る目　小林古径邸の美しさ
わたしの直江津　2002年☆直江津の旅？
　魚家明子

二〇〇二年九月／秋号　通巻七号

特集　1直江津五智遊覧の旅
　2甲信越のみなと　直江津の再生
ミニ特集　秋は寺町巡り
知の楽しみ　岩の原ワインの楽しみ
フリースペース
1すみれが大好きだったダン道子先生
2 相馬御風と中山晋平になる上越の新民謡
読書びと　ユルスナールの靴　須賀敦子著
見る目　越後の異才 東洋越陳人
わたしの直江津　銀河鉄道駅零時発　関由有子

二〇〇二年十二月／冬号　通巻八号

特集　1人びとの心を継ぐ天と地の恵み桑取谷　西横山小正月行事
　2直江津・五智十二景
ミニ特集　この秋直江津のまちでやったこと
知の楽しみ　健康老化は人類の夢？
フリースペース　直江津の音楽文化 その1
　―中井ソノ先生の思い出
読書びと　清陰星雨　中井久夫著
見る目　文安三年銘 府中八幡宮 鰐口
わたしの直江津　直江津恐怖体験　藤田英明

二〇〇三年三月／春号　通巻九号

特集　「海の恵み」―高田のまちに見える海の印象―
ミニ特集　高田のまちの近代洋風建物
知の楽しみ　日本一のカラスのまち
フリースペース　直江津の音楽文化 その2
　―海の入り日・上越市民吹奏楽団
読書びと　タマリンドの木　池澤夏樹著
見る目　直江津ゆかりの兄弟画家
わたしの直江津　なぜか、直江津　森子朗

二〇〇三年六月／夏号　通巻十号

特集　人が支える「頸城」の大地
知の楽しみ　たのしいおいしい考古学
フリースペース　今町が生んだ力士越ノ海勇蔵
読書びと　神谷美恵子 若きこころの旅　大田愛人著
見る目　木造一鎮倚像
わたしの直江津　マニキュア　佐藤光子

二〇〇三年九月／秋号　通巻十一号

特集　「鉄道唱歌」の旅人
ミニ特集　江戸城攻略弐万弐千歩のたび
知の楽しみ　海の総合的試験研究機関と共に歩んで
フリースペース　越後から大江山へ行った酒呑童子と茨木童子
読書びと　中島敦　父から子への南洋だより　川村　湊編
見る目　五智国分寺三重塔
わたしの直江津　夕日と酒　田中孝司

二〇〇三年十二月／冬号　通巻十二号

特集　働くまち 手しごとの人
　1920年代こんなまち
ミニ特集　画家「下村静四郎・妙華」
知の楽しみ　南極越冬で考えたこと―南極は環境を学ぶ教室
読書びと　私のアンネ＝フランク　松谷みよ子著
見る目　守護所の名品―上杉房定と京人
わたしの直江津　晶子に至る　柳家小満ん

二〇〇四年三月／春号　休刊

二〇〇四年六月／夏号　通巻十三号

特集　「空洞化」を乗り切る　上越地域の工業的発展
　新しい時代の地域づくりに向けて―上越地域の活性化への取り組み
新潟県初の登録文化財　万内川石積み堰堤群　日影沢床固工群
カメラの眼　義経記・笈探し・安宅・勧進帳
ひろば　巴御前を守った光源寺の祖・堀徳兵衛
読書びと　夫の右手　画・香月泰男　文・香月婦美子
歴史の風景　海獣葡萄鏡
寄稿　ライオンはみがき創業者小林富次郎
このまちのこと　グァンバレ、駅前商店街　橋本秋子

二〇〇四年九月／秋号　通巻十四号

特集　「川」の恵み
　母なる川、関川の再生を
自然の魅力豊かな五智公園に出かけよう
カメラの眼　追慕の碑　親鸞聖人上陸の地を巡る
ひろば　妙高・池の平温泉開発の恩人　星野錫翁
読書びと　聲のさざなみ　道浦母都子著
歴史の風景　御館
このまちのこと　何処へ、行くんだった？　ひぐちきみよ

二〇〇四年十一月／特別号　通巻十五号

写真特集　変貌するまち

二〇〇四年十二月／冬号　通巻十六号

特集　福永家文書に見る「直江津」のまちのかたち
「望楼」のある家　高岡市伏木北前船資料館
カメラの眼　時代まつり　おたや　花ロード
ひろば　日本初の女性従軍記者から国際的平和運動家へ　山岸(小岩井)多嘉子
読書びと　反省文ハワイ　山口智子著
歴史の風景　銅印
このまちのこと　海の響き　小島幸雄

二〇〇五年三月／春号　通巻十七号

特集　「高田」のまちにこめた祈り　地震
　上越地方の地形と地震の可能性
カメラの眼　埋蔵文化センター
読書びと　やがて麗しい五月が訪れ　原篠あき子全詩集　池澤夏樹編
歴史の風景　小丸山遥拝地の碑
このまちのこと　被災地で見えてきたこと　寺島義雄

二〇〇五年六月／夏号　通巻十八号

特集　上越の園芸作物
カメラの眼　まちに賑わいを　互の市
ひろば　北海道の鮭鱒資源保護の先駆者「ヤソの小池」
読書びと　死に臨む態度　上田三四二著
歴史の風景　会津墓地
このまちのこと　虫生へ帰る　中戸正子

二〇〇五年九月／秋号　通巻十九号

特集　景観　文学紀行
カメラの眼　コッペルが引っぱる　くびきのお宝
ひろば　皇后さまにお酌をした昭和天皇の侍医　村山浩一
読書びと　写真集　雪国はなったらし風土記
歴史の風景　福島城址
このまちのこと　良寛さんのように　伊倉潔

二〇〇五年十二月／冬号　通巻二十号

特集　横道　歴史散歩
カメラの眼　いつもこんなに賑やかだったらいいのにね
ひろば　公平誠実の外交を貫きとおして近代外交史を生きた人　芳澤謙吉
読書びと　アメリカの風　猿谷要著
歴史の風景　「越後騒動」の首謀者小栗美作墓地
このまちのこと　上流から下流へ　下流から上流へ　富永幸司

■読書びと



アメリカの風

猿谷　要著

実業之日本社刊
一七〇〇円

一九六五年のピューリッツァ賞作品、シャーリー・アン・グロウの『ハウランド家の人びと』は、アメリカ深南部の旧家を舞台に十九世紀から現代までの六代にわたる歴史を描き、白人と混血の少女の宿命的な愛を経糸に、後半では孫娘アビゲイルが血の交わりを憎悪する住民と対峙し銃を取るまでの陰翳にとんだ小説である。

ニューオーリンズに生まれ育ったこの女流作家はフォークナーに私淑し、〈南部の旧弊〉といった枠組みを超えて幻想的な精神感応の世界を創出した。六七年に弘文堂から出版されたばかりのこの本を新町にあったK書店で求めた私は、同時に訳者である猿谷要（さるやかなめ）という当時無名のアメリカ黒人史研究者を記憶に刻んだ。

新世紀を迎えあの九・一一の際に、アメリカ史研究の第一人者としてテレビのコメンテーターにたびたび登場した猿谷。野次馬評論家とは一線を画し、沈痛な面持ちで熱くマイノリティとの共生を説き続ける姿に、凡百の知米派とは異なる生涯を懸けた交感の厚みを見た。

猿谷要は一九二三年東京に生まれ、仙台の旧制二高在学中に応召、陸軍航空隊のパイロットとして敗戦を迎える。グラマンの風防ガラス越しに見た紅顔のアメリカ兵の面影に〈鬼畜〉とかけ離れた青春の躍動を感じ、「いま生命をかけて戦っているアメリカという敵国について、少なくとも私は何の知識も持っていない」と動揺する猿谷である。復員後東京大学文学部西洋史学科でアメリカ史を専攻するが、「敵性外国語といって英語さえ敵視されていた時代にアメリカの歴史についての学者など生まれ（てい）るはずもなく」手探りの研究を重ねた。高校教師の同僚であった早乙女志満と結婚、その後は東京女子大学で在野の歴史家として講筵を開く。ハーヴァード、コロンビア、ハワイ大学の客員研究員も勤め毎年のようにアメリカを旅してきた。

猿谷のフィールドワークの典型として、ハリケーンで注視された河口の町ニューオーリンズから、カナダ国境近くの源流（なんと海抜は僅四五〇メートル）まで六二一〇キロの大河を遡る旅の記録『ミシシッピ川紀行』（文藝春秋・一九九四）がある。愛妻と二人で車を駆り、市井の男女の視点でアメリカの歴史と文化を育んだ土地を辿る。悲惨な内戦だった南北戦争、人種や宗教対立を生む奴隷制度と移民問題の巨大な渦を追体験する日々は、同時代史として新たな人間関係を創出し、見事な比較文化論を生んだ。

『アメリカの風』は二〇〇二年に上梓された猿谷の初めてのエッセイ集である。三十年に亘って書き紡がれた五五編の文は、直接アメリカに関係のない身辺雑記にもその国の息吹が感ぜられる。姉妹編の『遥かなアメリカ―ある歴史家の回想―』（実業之日本社・二〇〇〇年）のエピグラフに「半世紀の歳月／ともに旅をした／わがパートナーに」と誌した志満夫人との二人三脚の人生。そこで出逢った様々な風景と人を、人柄そのままの伸びやかな語り口で綴る。

敬愛する石垣綾子を描く短文や、日本語新聞「ユタ日報」小史、南北戦争後の敗者の視点で會津処分を語る『白川以北一山百文』など猿谷の骨太な史観を垣間見ることができる。

「アメリカは独立してから僅か二百年あまりですから私はそのうち四分の一以上もアメリカとつき合ったことになります。」と自負する猿谷は、対テロ戦争を期に国際協調から逸脱するその国の在り様に〈老い〉を読みとり、『アメリカよ美しく年齢（とし）をとれ』と繰り返しエールを送る。

ヨーロッパやアジアの暮らしや景観への関心と比較すると、あまりにも雑駁な知識で向き合ってきた事を痛感するアメリカ。笑顔の優しいこの行動する老学究に導かれて、雪降る海辺の町から彼の国の風に吹かれてみよう。（浸）

海西 東陸



筆者は、いわゆる食通とかグルメなどではないということをお断りしておいて、お話を始める。

ちょっと前、さる、江戸っ子ではないけれど、それに近いお人が、

西（関西）のうなぎは違うねえー、ありゃ、文化の違いだよ

と、しみじみ（？）と、蒲焼の感想をを語ってくれた。それをたまたま西への旅の途中で思い出した。

「二本挿しが怖くてうなぎが食えるか」と、イキのいいのが、江戸っ子のうなぎの食い方らしいが、その割には手間隙がかかる。

まず、背開き（江戸は武家世界なので腹は切らない。腹ァー、切らせりゃいいのに）、それから焼く、蒸す、ようやく秘伝のタレに付けて焼く。

ここで真（しん）の江戸っ子は、じりじりしながら待つのである。

食感は「ふっくら、やわらか」。

一方上方は、腹開き、素焼き、タレを付けて本焼きである。

食感は香ばしく弾力があり「さくっ」としている。

感想をいえば、琵琶湖の淵で食べた「うな重」は、筆者にとっても「食の文化」を変えるものであった。そして勧められて、若狭で食べた「うなぎの蒸篭蒸し」も絶品であったが、「うな重」は違っていた。どちらともつかないのである。

このあたりが「東西」の違いを分けているのかもしれない。

食べ物の感想を文字にするのは大変難しいが、この「うなぎの蒲焼」の違いは、好みを通り越した明らかな「文化」の違いがあると思う。

このような違いを知ることができるようになったのは、誰もが遠くまで自由に移動できるようになったからである。

しかし、そのための錯覚とも思えることが、最近よくある。

筆者のもとへなぜか、東京のテレビ局からの問い合わせが多いのだが、「北前船の寄港地」ということで、「ホッケ」の話をはじめた。

戦後の配給時代を過ごした東京方面の人の多くは「ホッケなど口にしたくも無い」と今でも言うし、土地（ここ）でも昔は下魚とされていて、食べる人は少なかった。

配給で食べたのは「塩ホッケ」だと思われ、保存技術がよく無かった時代、あの芳醇な油は、腐食に近い状態だったと思われる。また、おいしい干物ができたのは、戦後もずっと後のことである。

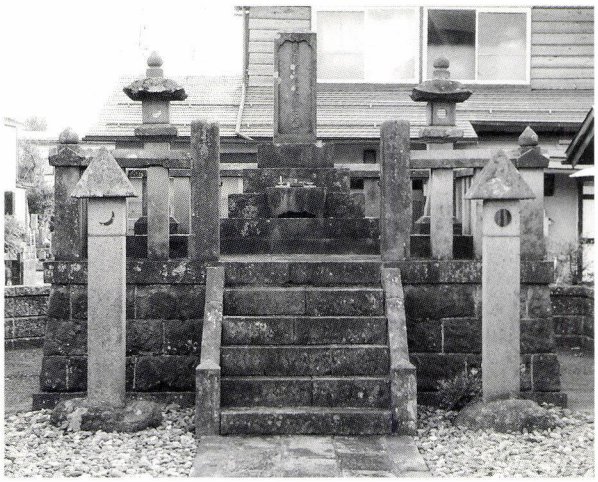
いま、「ホッケの開き」で一杯、ホッケのムニエル風で白ワインというのは、誰も不審には思わないし、そのことに対して「配給時代」の話をしても意味の無いことではあるが、マスコミの先端を自認する人達が安直に、

北前船→北海道→海の幸→干物→ホッケ

という図式は、鮭や鰊に悪いなぁ、と言う冗談はともかく、時代や土地柄について、まったく無知と言わざるを得ない。

（法）

歴史の風景









上左　小栗美作の墓　善導寺境内
上右　頸城平野を貫流する中江用水

下左　勘子の墓　天崇寺境内
下右　小栗屋敷跡　働く婦人の家敷地内

「越後騒動」の首謀者小栗美作墓地

上越市寺町二　善導寺境内

寛文五年（一六六五）十二月二七日に発生した寛文大地震（高田地震）で、高田藩家老小栗五郎左衛門と荻田隼人が死去すると、両者の嫡子、美作と主馬がその跡を継いだ。

幕府から五万両を借り受けて、震災復興に乗り出し、寺町を含む高田城下の再整備を断行、また江戸の事業家河村瑞賢の指導により、直江津港改修による北前船交易の強化、関川の舟運整備、中江用水の開削と野尻湖水利権の確保、大潟・大潟の新田開発、それらは美作の大きな業績として、今に伝えられている。

延宝七年（一六七九）一月、家中の三分の一の署名を集め、小栗美作に対する訴状が永見大蔵・荻田主馬に提出された。世に言う「越後騒動」の発端である。美作の専横への反発、後継藩主擁立争いが原因とされている。

幕府の裁定で、美作は職を退いて隠居し、騒動は解決したかのように見えたが、藩内の確執は収まらず、元和一年（一六八一）六月、将軍綱吉みずから再審し、美作・大六父子に切腹、永見大蔵・荻田主馬は八丈島遠島、光長は改易されて伊予松山へお預け、美作を極悪人とすることで、芝居に格好な題材を提供して「越後騒動」は終結した。

美作の正邪の真相は分からない。しかし、用水からの恩恵は永く人々に伝えられ、それは中江土地改良区へと引き継がれ、美作・勘子夫妻の墓は今も手厚く祀られている。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

■「ひろば」で紹介した芳澤謙吉について、緒方貞子さんは知っていても、犬養内閣の外務大臣を務め満州建国に反対した芳澤謙吉が彼女の祖父であり、上越市出身であることを知らない人が意外に多い。記念館（町内会へ申込み）には、あまり見るべき物が無いのは残念だが、手入れが行き届いた記念公園に立つ銅像に、謙吉をしのぶことができる。

■次号から、上越産業振興研究所（上越信用金庫内）のレポートを掲載する予定。

■本誌の母体である上越なおえつ信金倶楽部の夏の総会において、東洋思想家の境野勝悟氏の「日本のこころ」と題する講演があった。本誌で抄録するのは叶わないので、氏の著書を紹介しておく。

『禅の思想に学ぶ人間学』致知出版

『道元と良寛に学ぶ人間学』致知出版

■本号で二十号を数えることになったが、年数にすれば僅か五年に過ぎない。今後も上越後を見通して企画を進めていく予定。ひろくご支援のほどお願いしたい。

第6巻1号　3月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」冬号
第五巻四号　通巻二十号
発行日／平成十七年十二月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎ 〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十七年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)